

平成29年度第1回宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議 情報交換会 概要

開催日 平成29年6月9日(金) 14:30~16:30

会場 TKPガーデンシティ仙台 ホール30B

1 主な意見・内容

【Aブロック】

テーマ：地域課題と生活支援の充実に向けて

- 地域に沢山あるサロンを活かす。
- 移動の問題…運転免許返納した後の支援が必要。
- ボランティアが育っていない。
- 住民の人達の課題意識が育っていない。課題が見える化できない。
- プライバシーの問題と、必要と思われる支援でどうすべきか悩む。地域のしがらみ・人間関係・責任の所在について複雑なものがある。
- 移動支援について検討したいが、事故等何かあった時の対応をどうするか？
- デマンドタクシーは安いですが、使い勝手が悪い。

テーマ：市内の連携等について

- 市の市民協働課が、自治会単位での支え合い体制を構築している。
- 行政が主導的に「地域づくり」に住民を巻き込むことは少ない。
- 地域包括ケアについては、健康推進班が担当しているが、市内での話し合いは未実施。
- 行政各部署では、地域包括ケア的な“良い”活動(事業)を行っている。
- 福祉を初めて担当することになったので、言葉が解らない。例えば、協議体とは何するところなのか、社協とはどういうところなのか等。
- 新たに「地域包括ケア推進課」を設立し、連携構築を図る。課長レベル、担当者レベル等、定期的に集まる場と集め方を工夫している。
- 高齢者や自治会等対象者が違うだけで、市内には似たような課があり、実際には共有して取り組むべき。
- 市内全体での研修を実施し、目的を各部署に浸透させている。

テーマ：協議体と生活支援コーディネーターの役割等について

- 生活支援コーディネーターは、とにかく地域に出向き、リーダーとのつながりづくりや資源の発見、弁当配達のお店等にも行き情報収集を行っている。
- 第2層生活支援コーディネーターの横のつながりとして、毎月定例会を行っており、日頃の活動について見える化したまとめを検討中。
- 今後、どのようにコーディネーター活動をしていくか。
- 生活支援コーディネーターをホームヘルパーと間違われていた。

テーマ：それぞれの市町村の特徴について

- 介護保険料が安い。元気な高齢者が多く、住民間のつながりが強い。皆で支え合っているから制度を使わなくて済む。
- 住民力がある。
- 全ての圏域で、生活支援体制整備事業を社協に委託。ハードルを上げずに今の活動(地域福祉活動)を継続。社協が関わってきた30か所以上のサロンを包含し、事業展開。
- 市の地域包括ケア推進協議会が第1層協議体。

- 昨年、外部講師を招き、地域の課題を見つけ解決までの計画を立てるワークショップを実施。
- 災害関連で始まった事業・支援の仕組みを活かした継続性が必要。
- 地域柄、おすそわけや地縁等見えないつながりがあると感じる。

【Bブロック】

テーマ：協議体と生活支援コーディネーターの役割等について

- 第2層の課題をどう1層へ挙げていくか。
- 協議体のメンバーの中に、地元の高校生にも入ってもらう予定。（高校で地域包括ケアについて勉強中）
- 生活支援コーディネーター以外の職員も養成研修を受講し、支え合い体制づくりについて一体的に活動していく。
- 障害者や子ども関係の複合的なワーキングチームをつくる予定。
- 既存の地区社協の情報交換会を活用し、協議体へ発展させていく。

テーマ：庁内の連携等について

- 組織内での体制が整っていない。
- 内部の孤立や悩みの共有ができていない。
- 縦割りになりがち。目指すところのバラつきがある。
- 地域包括ケアはまちづくり。福祉部門の担当課だけでなく他の部署と一緒に行うべき。
- 高齢者だけでなく障害者や子どもも含め考えていくことが必要。

テーマ：関係機関との連携等について

- 地域で地域包括ケアについて説明を行うが、良く思われない。社協は住民から感謝されがちだが、行政は良く思われない。
- 自治会や団体とのつながり方について、専門職間の縄張りがある。
- 社協は基本的に地域を知っている団体であり、有効活用できる。
- 社協が動かない地域もある。
- 地域に入ってみると、色々なネットワークがあるが、一方で様々な人間関係が見えてくる。
- 地域へ出向き、区長や民生委員との話し合いをしている。
- 地域で地域包括ケアについて説明をするが、住民は他人事と思っている人がかなり多い印象がある。
- 認知症の方がいる場合の支援や気づきが上手くリンクしない。
- 何かをやることによって、初めて様々な壁が見えてくる。
- 地域性があり、平等に一体的な支援は難しい。
- モデル地区の行政区に的を絞って始めてみて、そこからの広がりが大切。

その他

- 他の市町との情報共有・情報交換の場があるといい。相談したい場合、誰に聞けばいいのだろうか？

【Cブロック】

テーマ：地域課題と生活支援の充実に向けて

- シルバー人材センターは、家事支援等いろいろなサービスを行っているのに住民に十分活用されていない。行政が広報して、もっと使い勝手の良い団体にしていくと良いのではないかと。
- 社協で行っている移動の有償ボランティアがある。（ガソリン代実費のみ支払い）

- 町民バスはバス停まで遠く、遠回りするため時間が掛かる。
- 住民同士の乗り合いを見える化し組織化できればいいと思う。移動支援について町全体で考える必要がある。
- デマンドタクシーをサロンの時に使えるといい。
- 町民バスよりイオンバスの方が使いやすい。
- タクシー使用の際、介助がないと高齢者には使い難い。

テーマ：協議体と生活支援コーディネーターの役割等について

- 生活支援コーディネーターは地域に出向き、グランドゴルフの集まりやサロン、健康カフェ等に参加している。
- 協議体のメンバーは色々な役職を兼ねている方が集まっているが「どんなことができるのか？」と言われる。
- 協議体で話し合う内容を地域の人に見えるようにするために、テーマを決め積極的に話し合った。皆で色々なことを話し合う協議体の本来の姿だと思った。
- 住民の支え合い活動を見つけている。地区の情報交換会を実施し、課題や移動支援についての情報交換を行った。

テーマ：庁内の連携等について

- 総務課と協力し、庁内の職員向けに地域包括ケアシステムの勉強会を行い、住民へもアピールする。
- まちづくりの一環として職員向けの勉強会を実施した。
- 庁内の横の連携が重要。
- 地域づくりの役職員と意識の共有ができるといい。
- 研修に力を入れ、各職員の協力が必要。縦・横のつながりを密にしたい。

テーマ：関係機関との連携等について

- 生活支援コーディネーターは社協へ委託したが、震災復興コーディネーターと兼務のため多忙で日程調整が思うように行かず、連携していく姿勢ではあるがなかなか難しい。
- 生活支援コーディネーターは社協へ委託。週1回の情報共有・話し合いと月1回行政担当課との打ち合わせを行っており、これから体制を整えていく。
- 町内会へ出向き連携しているが、なかなか具体的な動きにはならない。自由な発言の場となっており、ちょっとした心配事等は、時間は掛かるが住民が答えを出している。
- 地元で育つと、どことどこをつなげば良いかが見えてくる。

テーマ：地域の中の宝物（資源）について

- 病院の待合室が一つのサロンになっている。
- 学校の登校時の通学路に高齢者が立つようになり、見守りにつながっている。これが広がることで他の人の活動にもつながる。
- 地域の支え合い活動について、ガイドブックを作成した。
- 90か所の行政区で活動しているサロンの洗い出し・把握を行っている。

その他

- 同規模同士の市町の情報交換会があるといい。

【Dブロック】

テーマ：地域課題と生活支援の充実に向けて

- 過疎化が進んでおりスーパーがなくなった。全世帯に買物についてのアンケートを実施し、支援についてのモデル地区を決めたが住民の反対もあり、伝えるのが難しい。
- 移動の問題やコミュニティについての価値観の違いがあり、楽しいところからアプローチする必要性を感じている。
- 住民による有償ボランティアを立ち上げ、草むしりや買物、調理、子守り等を行っているが、ボランティアを稼働させるのが大変。
- 協議体の中でも移動の問題についての要望が出て来ている。一人で外出できない人の支援等について、今後、協議体で検討していきたい。
- 団地の中でも人と関わりに出ている人はいいが、出ていない人が心配。
- 弁当を作り配布し見守りを行っているが、継続するためには法人化する等の仕組みづくりが必要。
- 買物するにも店が少なく、家族にお願いしている。
- 週2回の配食サービスがあるが、配達範囲になっていない地域は断られている。
- 運転免許返納した人へバス代の助成を行っている。
- コンビニと見守り協定を結んでいるところがあり、拡大していければいい。
- 2,000円以上買い物をすると配達してくれる店がある。
- 冷凍のお弁当を1週間配達するサービスがある。
- 市民バスがあるが、山間部が多くバス停まで来られない方が多い。
- 要介護3以上の方、非課税の方、運転免許返納した方に月1,500円のタクシー券を配布しているが、タクシー会社との兼ね合いも難しくトラブルもある。
- シルバー人材センターで、弁当1食500円の利用券を購入してもらい利用している。

テーマ：協議体と生活支援コーディネーターの役割等について

- 協議体について、行政の他部署に伝わりにくい。
- 住民に理解してもらう前に行政が理解しないといけない。
- 協議体はワイワイ・ガヤガヤがいい。
- 協議体のメンバーの人选はどのようにすればいいか。
- 協議体を作ることが先なのか悩んでいる。
- 協議体でのテーマ設定はどのように決めていくか。

テーマ：庁内・関係機関との連携等について

- 包括エリアごとに協議体を立ち上げたが、内部の連携が取れない。
- 生活支援コーディネーターが活動をする上で、部署内の理解が得られていない。
- 専任の生活支援コーディネーターではないため、地域へなかなか出られずきつい。
- 専任の生活支援コーディネーターだが、全部一人で行っており孤独感を感じる。
- 役場・包括・社協間での調整ができていない。

テーマ：それぞれの地域の特徴について

- 過疎化が進んでいるところと人口増加のベッドタウンのところがあり、生活課題がそれぞれ違うが、古くからの生活を大事にしたい。
- 客観的に見ると大変と思うことも、住民はそれなりにやっている。
- 一人暮らしや高齢者夫婦が多く復興住宅もある。コミュニティは震災後に広まった。日常の当たり前に行っている支え合いを意識してもらい広めていきたい。

- 支え合いが元々できている地域があり、自分達でやっているという自負がある。

テーマ：地域との関わりについて

- 住民のお茶飲み会へ2, 3回参加し、事業の説明をするが「何しに来たんだ」と言われ、伝えるのが難しい。少しずつ時間をかけてやらないといけない。
- 住民の中へは勉強させてもらう姿勢で入っていく。
- 地域の集まりに積極的に参加し顔を覚えてもらう。男性はお酒を飲むと話せる。
- 口頭だけでは理解しにくい。写真入りのチラシを持参し説明している。住民の活動を広報に掲載すると住民は喜ぶ。そこから広がっていく。
- メールアドレス付きの名刺を配り、住民の方とメールでやり取りをしている。
- 出前講座で地域の宝物探しをしており、自分達の地域の歴史等の話は盛り上がる。住民が気付くことから行くと入り込みやすい。
- 地域でキーパーソンになる人へ働きかけているが、「住民へ丸投げ」等負担感があるようだ。

【Eブロック】

テーマ：地域課題と生活支援の充実に向けて

- 町内会主体で、近所の方が気軽に立ち寄れるサロン「まちかどカフェ」が3か所立ち上がった。
- 買物支援について、事前に欲しいものを連絡し届けてもらうシステムがある。
- 個別に訪問している移動販売車について、サロン開催時に来てもらうことについて提案。
- サービスありきではない。

テーマ：協議体と生活支援コーディネーターの役割等について

- 生活支援コーディネーターとして、とにかく地域に足を運んでいる。
- 生活支援コーディネーターの人選が難しい。
- 既存の会議等を活かして協議体を始めた。
- 生活支援コーディネーターの役割を理解してもらうことに努めなければならない。
- 「協議体」という呼び方が堅い。
- 地域性に違いがあり、協議体を同じようにやることはできない。
- 協議体のメンバーには地域の人が入るのが大事。現場の声が大事。

テーマ：委託・受託（行政と社協）との連携について

- 役場と社協の温度差がある。
- 委託にあたり、事業として形の見えるものにできるかという課題がある。委託の成果をどこまで出せるのか。
- 生活支援コーディネーターを委託したが、人事や予算等の捉え方に違いがあり難しさがある。
- 町から近隣の町の例を出され急かされる。
- 町と社協で話し合いながら色々決めている。温度差を解消できるのは人間関係だと思う。
- 社協には覚悟がある。法人で整理されている。
- ざっくばらんに話す場があればいい。

その他

- 制度内福祉と制度を超えた福祉が補完し合えるといい。

2 アドバイザー講評

- 社協や行政の関係や連携について、それぞれ持ち味が違うので、強みや弱みを理解し合いながら連携していくことが大事。
- 社協はあまりないが、行政は異動があるため、戸惑うことも多い。庁内体制づくりも含めて、以前の部署の経験も活かせるのではないかな。
- まちづくりを行ううえで、庁内の連携は欠かせない。
- 協議体のメンバー構成で悩んでいるようだが、第1層、2層、3層の役割があると思う。第3層は近な課題を考え、第1層は地域全体を大きな視野で考える役割であることを意識すれば良いのではないかな。
- 各協議体を有機的につなげていくのがコーディネーターの役割の一つである。
- 地域包括ケアの考え方はそれぞれ違う。共生社会という考えは組織の縦割りで対応できないことを意識しなければならない。
- 地域の中で高齢・障害・子育て・生活困窮などの支援を行うためにも、縦割りでなくプラットフォームでなければならない。
- 地域ごとに、支え合いの仕組み作りについてオーダーメイドでコーディネートしていくのが宮城県地域支え合い連絡会議である。
- 生活支援コーディネーターは一生懸命活動している。沿岸部の被災者支援に従事していた職員が生活支援コーディネーターとして育ってきている。
- 進めていく中で色々な課題に直面するが、進みながら解決策を見出していくことになる。
- 司会者が楽しんで進行していた。発表者のまとめも良かった。
- 各市町村の特徴ある取組みを共有できていた。
- 住民に理解していただくのはもちろんだが、庁内の他部署の理解も必要。
- 協議体の人選に悩んでいたたり、協議体の進め方に悩んでいるところが多かったが、そのような場合は、まずコーディネーターの活動を優先にした方が良い。
- 委託と受託の関係性や考え方の方向性を整理する必要があるが、生活支援コーディネーターの役割でもある。コーディネーターは情報を整理し自分の言葉でアウトプットすることが必要。
- 地域づくりは地区ごとに進み方が違う。地区ごとに合ったやり方を見極めることはこの事業の特性である。その上で、高齢化率等に惑わされず、個別の課題を地域の課題として整理し政策提言につなげていくこと。
- 行政は委託して終わりではない。生活支援コーディネーターに仕事を任せ、育てることに責任を持って関わってもらいたい。
- 第1層、2層、3層の役割はそれぞれ違うが、目的は一つであることを理解すること。

3 まとめ 大坂委員長

宮城県では、県の協議体をつくり市町村の支援をしながら、この事業を県内の隅々まで広げ、住民が住みやすい地域にしていくことを行っている。色々な悩みや苦労等があるが、スキルアップのための研修やアドバイザー派遣、情報交換会等を上手に使ってもらうことが、この事業を上手に発展させるコツ。このような場へ積極的に参加し、参加者同士がつながり、共有し自慢したりしながら普段から情報交換を行ってもらいたい。今後の皆さんの活躍を期待する。